



特設コーナーで切り花を買い求める来店者

帰省自粛のお盆商戦 切り花など買い求める

青果物直売所「みょうが館」ではお盆需要に対応するため8月7日～13日の期間を「お盆セール」と銘打って営業すると、盆の入り前の11日からは特に買い物客で混雑したことから、1時間開店時間を早めるなどして対応しました。

夫婦で買物を終えた女性は「昨年引き続き寂しいお盆を迎えることになったが、夫と一緒にいつも通り先相様をお迎えするために買い物にきた。ご先相様をお迎えすることは大切だけど、本当は埼玉にいる2人の孫を迎えて楽しいお盆を過ごしたかった」と寂しい表情を見せていました。

みょうが館は、旬の「白神みょうが」をはじめとする採れたて新鮮青果物や、墓や仏壇用に供えるキキョウやユリ、白神リンドウの切り花を多数扱い求める来場者によって、この時期ならではの賑わいを見せています。

露地栽培日本一の奪還を目指して僕たちはがんばります!



みょうが部会（大高英樹部会長）が8月中旬に撮影した「白神みょうが」のPR動画が遂に完成しました。完成したPR動画はDVDにして、首都圏の市場に配布したほか、JAホームページや動画投稿サイト「YouTube」でも公開し、今後広くPRしていきます。

当組合では、例年JA役員や生産者が各青果物を首都圏や量販店に売り込む販促活動を行っており、しかし、コロナ禍の影響で昨年に引き続き実施出来ない状況にあることから、その代替販促活動として各作物のPR動画の作成に取り組んでいます。

昨年秋には「白神ねぎ」のPR動画を初めて作成し、第2弾となった「白神きゃべつ」は、今夏出荷最盛期に合わせて撮影してPRしました。

第3弾となる「白神みょうが」のPR動画は音楽や字幕を付けて5分12秒。大高部会長の畑で「世界自然遺産白神山麓の麓で、白神みょうがを一粒一粒丁寧に手摘みして、僕たちが皆さまにお届けします。」と呼びかけ、実際にみょうがを摘み取る様子や、みょうが畑の中から、生産者が顔をひょこり出してやりとりするシーン。また、部会長が今後の抱負や、「白神みょうが」の特徴などを説明するシーンなどを織り交ぜ、「白神みょうが」の栽培に取り組む生産者らの熱意を伝える内容となっています。

みょうが担当の近藤宮農指導員は「かつて、「白神みょうが」は露地栽培日本一の「みょうがの里」として栽培が盛んであったが、近年、根茎腐敗病の発生や生産者の高齢化の進行などにより産地としての規模が

完成したPR動画は、インターネットで『白神みょうがPR動画』と検索するか、下記、URLまたはQRコードからご視聴頂けます。

白神みょうがPR動画

検索

動画URL <https://youtu.be/OFv5jhvrRRk>



縮小傾向にある。同部会としても露地栽培日本一の奪還が目標なので、今回初めて作成した「白神みょうが」PR動画を足掛かりに、部会員とJAがより一層強力タッグを組んで盛り上げていきたい。」と意気込みます。

『おらほの農機展示会』開催!!



完成した第144回秋田県種苗交換会ポスター

当地で開催される第144回秋田県種苗交換会（10月29日～11月4日）で、当組合とJA秋田やまもと（代表理事組合長榎森保雄）は協賛イベントとして「おらほの農機展示会」地域農業を支える農業機械」を開催することを決定しました。

イベントでは「白神ねぎ」や「白神きゃべつ」など地域の主力品目の栽培を支える、播種から収穫時までの作業工程に使用する農機を順に展示する予定です。

人気イベントの一つである「農業機械化ショー」等の開催がコロナ禍の影響で昨年に引き続き中止が決定していたことから新たに企画されました。

佐藤組合長は「秋田県農業の礎を築いてきた交換会で、来場した農家の方々が、県内でも先進的に複合経営、畑作物の生産拡大が進む当地の農業を支える農機と創意工夫された農機の使用法、技術を参考にしてみたい、地元で試してみたい」と、より一層の県内農業発展の一助になつてほしい。」と独自の農機展示会が県全体の農業振興につながることに期待します。

会場は協賛第2会場で、新型コロナウイルス感染症予防対策を十分に施し開催されますのでお楽しみに!

適期防除を徹底して、出来秋を笑顔で。



講話を熱心に聴講する大豆生産組員

大豆生産組合（大塚忠之組合長）が、8月20日現地圃場巡回研修会を開催しました。生産者や秋田県農業試験場の担当者ら25人が参加し、今後の肥培管理や生育状況などを、管内の圃場を巡回するなどして認識を共有しました。

大塚組合長は冒頭のあいさつで「これからが、出来秋を左右する大切な時期。生育管理、病害虫防除を徹底して、皆笑顔で収穫期を迎えましょう。」と呼びかけました。

JA管内では大豆は転作作物の代表格として、大規模に栽培する担い手農家や農業法人が点在しています。2020年度産は、8月の雨や強風で倒れたり、花や葉が落ち、その後の高温・干ばつでしわ粒が多くなるなど、あらゆる悪天候条件が重な



圃場巡回時に生産者間で積極的に情報共有を図りました。

り、平年10ア当たり180～200kgだが、管内平均でおよそ149kg前後の収量と大幅な収量減と品質低下に見舞われました。

営農指導員の大山係長は「今年度も高温少雨による干ばつの影響により、茎の伸長や葉の展開等が抑制されている圃場が見られる。今後管内の病害虫の発生状況を確認するため積極的に圃場巡回して、病害虫の適切な防除期を見定めながら、生産者とあらゆる情報を共有していきたい。」と2021年産のあきた白神大豆の挽回を目指します。

